

「新型コロナウイルス感染拡大に関連した実践活動及び研究」成果報告書

1. 実践活動・研究の名称

環境および行動変容とアディクションの関係に関する研究
——新型コロナウイルス感染症対策を例として——

2. 実践活動・研究の成果

(1) グループ代表者

①氏名：加藤 篤士

②所属・職名：早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育心理学教室 助手

③構成メンバー（5）人

氏名：周 雨菲

所属・職名：早稲田大学 教育学研究科修士課程

氏名：比企 薫

所属・職名：早稲田大学 教育学研究科修士課程

氏名：山本 琢俣

所属・職名：早稲田大学 教育学研究科博士後期課程

氏名：久保 沙織

所属・職名：東北大学 高度教養教育・学生支援機構 准教授

氏名：堀 正士

所属・職名：早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授

(2) 実践活動・研究の成果

目 的

2019年末に発見され、2020年3月にWHO（World Health Organization：世界保健機関）からパンデミックと特徴づけられた新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19という）は、世界規模で感染対策が取られている。WHOは2020年3月にCOVID-19大流行中の物質使用または嗜癖行動に注意を呼びかけ、我が国においても2020年4月には厚生労働省等からアディクションへの注意喚起（依存症と嗜癖に対する警告）が発せられた。近年リスクの高いアルコール使用は、大量飲用や依存傾向によって社会問題として注目されることが多い。そこで、COVID-19感染拡大防止のための外出抑制策（以下、ステイホームという）環境下で飲酒量や飲酒頻度が増加した者に、飲酒動機やパーソナリティ特性の視点から特異的な要因が存在するか、探索的に検証することを本研究の目的とした。

方 法

調査対象者

本助成金を受けた調査は、2020年12月にオンライン調査により実施した。大手通販会社に登録しているパネルのうち、東京都（島嶼部を除く）に在住かつ勤務している者を対象として調査したところ、715名から回答を得た。

質問項目

①生活の変化 今年のステイホーム後と昨年の同時期の生活を振り返り、テレワークになるなど平日における日中の主たる生活の場に「変化があった(平均して週の半分以上)」、「変化があった(平均して週の半分より少ない)」、「ない」、の3選択肢から1つ選択させるとともに、生活の変化によってストレスが増したと感じているかどうかを「はい」か「いいえ」の2択で回答させた。

②飲酒量 AUDITの質問項目である「飲酒するときには通常どのくらいの量を飲みますか?」(ドリンク数を回答)を参考にし、10mlの純アルコールを1ドリンクとカウントする方法を用いて算出した。質問紙上で「1回あたりの飲酒量はどのくらいの量でしたか(例:ビール中ジョッキ2杯、缶ビール350ml缶を3本など)」と質問して自由記述形式で具体的に回答させ、研究グループがドリンク数に換算した。

③飲酒頻度 AUDITの質問項目をそのまま利用し「1. 飲んでいない」、「2. 1か月に1度以下」、「3. 1か月に2-4度」、「4. 1週に2-3度」、「5. 1週に4度以上」の5選択肢から1つ選択させ、それぞれに1-5点の数値を与えた。

④飲酒場所 主な飲酒場所は「飲食店」、「自宅」、「その他」の3選択肢から1つ選択させ、「その他」には場所を記入するための自由記述欄を設置した。

⑤飲酒動機 飲酒動機尺度DMQ-R日本語版(Drinking Motives Questionnaire - Revised, Cooper, 1994, 岡田, 2020. 以下, DMQ-Rという)を用いた。各質問項目について「1. 全くない」、「2. ほとんどない」、「3. どちらでもない」、「4. ほとんど」、「5. いつも」の5件法で回答させた。DMQ-Rの「社交」「対処」「高揚」「同調」4下位尺度について、因子ごとの5つの質問項目を1因子当たり5-25点で数値化した。

⑥Big Five 日本語版 Ten Item Personality Inventory(小塩・阿部・Pino, 2012. 以下, TIPI-Jという)を用いた。Big Fiveの5因子(a)神経症傾向、(b)外向性、(c)開放性、(d)協調性、(e)勤勉性の各因子に2質問項目ずつ8件法で回答させ、1因子当たり2-16点で数値化した。

結果

生活の変化

分析対象者715名の年齢の平均は46.42歳($SD=12.96$)、男性396名、女性319名であり、独居者235名、同居家族あり480名であった。ステイホームによる行動変容(週の半分以上)あり246名(34.41%)、(週の半分未満)あり143名(20.00%)、変容なし326名(45.59%)で、行動変容があった389名中ストレスが増したと回答した者は223名(57.33%)であった。

飲酒量と飲酒頻度および飲酒場所

飲酒量について2019年と2020年を比較したところ、増加した者が109名(15.24%)、変化しなかった者が460名(64.34%)、減少した者が146名(20.42%)であった。また、飲酒頻度を2019年と2020年について比較したところ、1か月に1度以下の者が106名(14.83%)から163名(22.80%)に増加、1か月に2-4度の者が173名(24.20%)から130名(19.18%)に減少、1週に2-3度の者が158名(22.10%)から139名(19.44%)に減少、1週に4度以上の者は278名(38.88%)から283名(39.58%)とほぼ変わらなかった。主な飲酒場所について2019年と2020年を比較したところ、飲食店が296名(41.40%)から108名(15.10%)に減少、自宅が413名(57.60%)から600名(83.90%)に増加していた。

ステイホーム前後の飲酒量と飲酒頻度の変化を検討した(Table 1)。対応のある t 検定の結果、2020年では2019年に比べて飲酒量($t(714) = 4.25, p < .01$)、飲酒頻度($t(714) = 4.06, p < .01$)共に有意に減少しており、2020年では対象者の飲酒行動が減少したことが示された。

飲酒動機と Big Five

2019年と2020年の飲酒動機尺度について、4因子それぞれの尺度得点の変化を検討した。対応のある t 検定の結果、社交 ($t(714) = 22.37, p < .01$)、対処 ($t(714) = 4.35, p < .01$)、高揚 ($t(714) = 8.69, p < .01$)、同調 ($t(714) = 11.78, p < .01$) となり、2020年では4因子ともに有意に減少していた。

また、飲酒量と飲酒動機の相関について検討するため、飲酒量、飲酒頻度と DMQ-R の4尺度得点についてスピアマンの順位相関係数を算出した (Table 2)。その結果、飲酒量では、2019年の飲酒量と2019年の飲酒動機に関して社交 ($r_s = .13, p < .01$)、対処 ($r_s = .09, p < .05$)、高揚 ($r_s = .19, p < .01$) と正の相関が認められた。2020年の飲酒量と2020年の飲酒動機に関しても同様に、社交 ($r_s = .09, p < .05$)、対処 ($r_s = .14, p < .01$)、高揚 ($r_s = .19, p < .01$) と正の相関が認められた。

酒量変化では、2019年の飲酒動機に関して社交 ($r_s = -.14, p < .01$) と負の相関が認められた一方、2020年の飲酒動機に関しては対処 ($r_s = .14, p < .01$)、高揚 ($r_s = .11, p < .01$) と正の相関が認められた。

2019年の飲酒頻度と2019年の飲酒動機に関して対処 ($r_s = .13, p < .01$)、高揚 ($r_s = .21, p < .01$) と正の相関が、社交 ($r_s = -.09, p < .05$) と負の相関が認められた。一方、2020年の飲酒頻度と2020年の飲酒動機に関しては対処 ($r_s = .16, p < .01$)、高揚 ($r_s = .21, p < .01$) と正の相関が認められた。

頻度変化では、2019年の飲酒動機に関しては有意な相関が認められず、2020年の飲酒動機に関して対処 ($r_s = .09, p < .01$) と正の相関が認められた。

715人の対象者のうち、146人の対象者はステイホーム前よりも飲酒量が減少していたが、460人の対象者は飲酒量の変化が無く、109人の対象者は飲酒量が増加していた。2019年と2020年の間で飲酒量の変化と飲酒動機の間を調査するため、分析対象者を飲酒量の変化によって増加群・無変化群・減少群の3群に分類し、2019年と2020年それぞれの DMQ-R の下位尺度得点を一元配置分散分析により比較した (Table 3)。その結果、2019年の飲酒動機では、社交 ($p < .01$)、対処 ($p < .01$)、高揚 ($p < .01$)、同調 ($p < .01$) において群間有意差が認められた。また多重比較の結果、減少群、増加群、無変化群の順に社交の得点が高かった。2020年の飲酒動機では対処 ($p < .01$) と高揚 ($p < .01$) において群間有意差が認められ、増加群は減少群 ($p < .01$) や無変化群 ($p < .01$) よりも有意に得点が高かった。

2019年と2020年の間で飲酒頻度の変化と飲酒動機の間を調査するため、分析対象者を増加群、無変化群、減少群の3群に分類し、2019年と2020年それぞれの DMQ-R の下位尺度得点を一元配置分散分析により比較した (Table 5)。その結果、2019年の飲酒動機では、社交 ($p < .01$)、と同調 ($p < .05$) において群間有意差が認められた。また多重比較の結果、無変化群は減少群よりも社交の得点が有意に低く ($p < .01$)、増加群は無変化群に比較して同調が有意に高かった ($p < .05$)。

2020年の飲酒動機では、対処において群間有意差が認められ ($p < .01$)、増加群は減少群 ($p < .01$) や無変化群 ($p < .05$) よりも有意に得点が高かった。

TIPI-J と飲酒動機の各下位尺度間のピアソンの積率相関係数を算出した結果 (Table 5)、得点の時期 (2019年, 2020年) にかかわらず、外向性は社交的な飲酒動機と有意な正の相関関係にあり ($p < .001$)、協調性は対処的な飲酒動機と有意な負の相関関係 ($p < .001$)、同調的な飲酒動機と有意な負の相関関係 ($p < .01$) にあり、勤勉性は対処的な飲酒動機と有意な負の相関関係にあり ($p < .01$)、神経症傾向は対処的な飲酒動機と有意な正の相関関係 ($p < .001$)、同調的な飲酒動機と有意な正の相関関係にあった ($p < .01$)。また2019年の飲酒動機得点において、勤勉性は同調的な飲酒

動機と有意な負の相関関係にあり ($p < .05$) , 開放性は社会的な飲酒動機と有意な正の相関関係にあった ($p < .01$) 。2020年の飲酒動機得点において、外向性は対処的な飲酒動機と有意な負の相関関係にあった ($p < .05$) 。

Big Five は個々の下位尺度を個別に解釈するだけでなく、5つの特性の高低のパターンによってパーソナリティを典型的に捉えるという試みがなされている (Block & Block, 1980 ; Asendorpf, Borkenau, Ostendorf, & van Aken, 2001) 。本研究でも、個人のパーソナリティ特性を典型的に捉え、飲酒動機との関連を検討するために、まず嘉瀬・上野・大石 (2017) に従い、Big Five の尺度得点を用いて K-means 法による非階層的クラスター分析を行ったところ、4クラスターが抽出された。第1クラスターには111名 (14.42%) , 第2クラスターには361名 (46.88%) , 第3クラスターには151名 (19.61%) , 第4クラスターには147名 (19.09%) の対象者が含まれた。第1クラスターは、神経症傾向が高く他の特性が低いことから「情緒不安定型」と命名した。第2クラスターは、外向性が高く協調性が低いことから「統制不全型」と命名した。第3クラスターは、外向性が低く協調性が高いことから「統制過剰型」と命名した。第4クラスターは、神経症傾向が低くその他の特性が高いことから「レジリエント型」と命名した。

次に、これらの Big Five によるパーソナリティタイプと飲酒動機の変化との関連を検討した。調査対象者のパーソナリティタイプを独立変数、飲酒動機の差分得点を従属変数として、一元配置分散分析を行った (Table 6) 。主効果の確認されたものには Tukey の HSD 法による多重比較を行った。分析の結果、対処的な飲酒動機の変化において、パーソナリティタイプの主効果が有意であり、情緒不安定型が統制不全型とレジリエント型よりも高い得点を示した。

貢 献

ステイホームにより機会飲酒が減少した環境下で、主な飲酒場所が飲食店から自宅に変化し、飲酒頻度が減少するとともに1回あたりの飲酒量は有意に減少した。環境の変化による機会飲酒の減少が、飲酒量の減少に関連したことを示唆すると考えられた。また、このような環境下にあっても一部の者は飲酒量が増加しており、飲酒量・飲酒頻度の増加と Big Five の間に統計的には有意な関連がみられたことは興味深い。

かつてアルコール依存に関するパーソナリティ研究が盛んに行われたが、現在ではむしろ誰でもなり得る病気であるとされ、一次予防に関してパーソナリティを測度とする研究は少ない。現在多く使用されているものは、本人のアルコール耐性を調べるアルコールパッチテストと飲酒傾向を把握する質問紙 (AUDIT) である。しかし、我々の研究ではアルコール耐性が無いにも関わらずアルコール依存症を発症した例が一定程度存在する。また、AUDIT でスクリーニングできる者は、既に問題のある飲酒傾向が発生しているケースである。現状では、一次予防に有効なスクリーニング方法は確立していない。しかし、本研究で検討したようにパーソナリティ特性によって飲酒動機や飲酒行動に特徴が存在する可能性がある。将来の問題のある飲酒を起こす可能性が考えられる者を把握することが出来れば、本人に対して早期に個別の注意喚起が出来ると考えられる。

今後は、さらなる貢献につなげられるよう、今回の調査結果や介入方法の検討について学会発表、学術論文として公表するとともに、実際の臨床現場とも連携した情報発信を進めていく予定である。

学会発表

学術雑誌論文を投稿し査読中である。

Table 1 飲酒量・飲酒頻度の平均値の比較

	2019年 (n=715)		2020年 (n=715)		t
	M	SD	M	SD	
飲酒量	4.01	3.08	3.69	2.83	4.25**
飲酒頻度	3.85	1.10	3.76	1.20	4.06**

** p<.01

Table 2 飲酒量・飲酒頻度と飲酒動機との相関

	飲酒動機 (n=715)			
	社交	対処	高揚	同調
飲酒量	.13** .09*	.09* .14**	.19** .19**	.05 .07
酒量変化	-.14** -.02	.07 .14**	-.01 .11**	-.01 .06
飲酒頻度	-.09* -.03	.13** .16**	.21** .21**	-.06 .01
頻度変化	-.09 .00	.03 .09**	-.03 .06	.01 .04

注) 各セルの上段が2019年の値, 下段が2020年の値。 ** p<.01 * p<.05

Table 3 飲酒量の変化と飲酒動機の因子得点との関連

	飲酒量の変化			主効果 F (2, 712)	多重比較
	増加 (n=109)	無変化 (n=460)	減少 (n=146)		
	M (SD)	M (SD)	M (SD)		
2019年					
社交	14.87 (4.92)	12.81 (4.84)	16.37 (4.64)	33.15**	減少>増加>無変化
対処	12.41 (4.48)	10.11 (4.73)	11.06 (4.94)	11.09**	増加>無変化
高揚	16.99 (3.93)	14.73 (4.67)	16.40 (4.77)	14.95**	増加, 減少>無変化
同調	9.72 (4.48)	8.42 (3.87)	9.45 (4.28)	6.67**	増加, 減少>無変化
2020年					
社交	10.08 (4.96)	9.96 (4.85)	10.24 (4.84)	0.19	
対処	12.67 (5.2)	9.67 (4.97)	10.11 (5.14)	15.61**	増加>減少, 無変化
高揚	16.37 (4.61)	14.04 (4.96)	14.20 (5.40)	9.76**	増加>減少, 無変化
同調	8.10 (4.26)	7.67 (4.01)	7.20 (3.45)	1.68	

** p<.01 * p<.05

Table 4 飲酒頻度の変化と飲酒動機の因子得点との関連

	飲酒頻度の変化			主効果 F (2, 712)	多重比較
	増加群 (n=69)	無変化群 (n=525)	減少群 (n=121)		
	M (SD)	M (SD)	M (SD)		
2019年					
社交	14.72 (4.92)	13.34 (5.01)	15.56 (4.75)	11.03**	減少>無変化
対処	11.30 (4.54)	10.55 (4.80)	10.74 (4.96)	0.77	
高揚	15.75 (4.24)	15.31 (4.65)	15.66 (5.01)	0.47	
同調	9.88 (4.79)	8.59 (3.89)	9.28 (4.40)	3.96*	増加>無変化
2020年					
社交	9.86 (4.55)	10.06 (4.90)	10.02 (4.86)	0.06	
対処	11.90 (5.36)	10.13 (5.15)	9.64 (4.82)	4.58*	増加>減少, 無変化
高揚	15.29 (4.40)	14.47 (5.02)	13.74 (5.51)	2.16	
同調	7.93 (4.05)	7.66 (3.93)	7.40 (3.95)	0.42	

** p<.01 * p<.05

Table 5 Big Five パーソナリティと飲酒動機との相関係数

	社交	対処	高揚	同調
外向性	.21*** .12***	-.05 -.08*	.07 .02	.03 .04
協調性	.05 .00	-.17*** -.14***	.02 .05	-.12** -.11**
勤勉性	.00 -.04	-.11** -.12**	-.02 -.04	-.08* -.07
神経症傾向	.01 .04	.24*** .26***	.07* .07*	.10** .12**
開放性	.10** .05	-.00 -.04	.04 .01	.05 .02

注) 各セルの上段が2019年の値, 下段が2020年の値。

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

Table 6 パーソナリティタイプにおける飲酒動機の差分得点と分散分析の結果

	パーソナリティタイプ				主効果 F (3, 711)	多重比較
	情緒不安定型	統制不能型	統制過剰型	レジリエント型		
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)		
社交の差分	-3.63 (4.31)	-3.73 (4.59)	-3.36 (4.56)	-4.65 (4.62)	2.11	
対処の差分	0.37 (2.33)	-0.63 (2.96)	-0.43 (2.42)	-0.60 (2.39)	3.94**	情緒>統制不能・レジリエンス
高揚の差分	-0.62 (2.82)	-1.14 (3.33)	-0.76 (2.32)	-1.16 (3.15)	1.17	
同調の差分	-1.06 (2.78)	-1.27 (2.91)	-1.25 (2.53)	-1.06 (2.28)	0.29	

** p<.01

2021年 9月 30日

「新型コロナウイルス感染拡大に関連した実践活動及び研究」会計報告書

活動・研究名称	環境および行動変容とアディクションの関係に関する研究——新型コロナウイルス感染症対策を例として——	
代表者 氏名・所属	加藤篤士	早稲田大学

1. 助成額	¥450,000
2. 支出合計	¥449,993
(1) 機器・備品	
1) パソコン一式	¥135,300
2)	
3)	
(2) 消耗品	
1)	
2)	
3)	
(3) 旅費・交通費	
1)	
2)	
3)	
(4) 謝金	
1) オンライン調査費用	¥313,500
2)	
3)	
(5) その他	
1) 書籍2冊	¥1,193
2)	
3)	